

# 江戸文学と珠算（一）

鈴木久男

## 目次

- 一 まえがき
- 二 渡来の前夜（キリシタン文化とそろばん）
- 三 元禄文化とそろばん

## 一 まえがき

本誌13号で私は「古そろばん考」を執筆し

- 一 そろばんとは
- 二 算盤の発生
- 三 そろばんの伝来

などについて簡単な紹介を行なっているので本論文ではこれを省くことにするが、算盤は中国で14世紀の中ごろ以降に文献上に登場し、16世紀中ごろ以降日本に舶載されたものである。

以下の論文においては、そろばんが舶載されて以降、それが民衆の間に愛用され、経済生活の上に無くてはならぬものとなって行った歴史的な推移を、主として文学作品の上から考証しようとするものである。

## 二 渡来の前後（キリシタン文化とそろばん）

そろばん渡来の事実を証拠づける資料として、私はいつもつぎの四点の存在を紹介している。すなわち

1 文禄の役るとき、前田利家が肥前名護屋の陣中で使用した古そろばんが現存しており、これは日本で作られたものであること。

2 中国で、一五七〇年代に執筆された「日本風土記」に、「算盤 所六盤 そろはん」の記載のあること。

3 16世紀の末、狩野吉信の画いた「職人尽絵」（屏風図、川越喜多院蔵）の縫取師の絵の中にそろばんが画かれていること。

4 一五九五年天草で出版されたラテン語をポルトガル語と日本語に訳した辞典（ラ・ポ・日対訳辞典と略称されている）の中にそろばんの記載があること。

がこれである。この章では、キリシタン文化を中心に述べて行くことにしよう。

フランシスコ・ザビエルが、アンジローと呼ばれる薩摩の武士を伴って中国のジャンク船で鹿児島に到着したのは一五四九年（天文十八）のことであった。翌年には肥前の平戸に移り、二人の従者をつれて博多、山口、堺を経て京都へ入った。天皇または将軍に面会して全国布教の許可を求めようとしたからである。しかし群雄割拠の時代とあって、天皇も将軍も実力が無かったために、ザビエルの夢はくだかれ一五五一年には日本を去って行った。しかし彼がまいたカトリック（旧教）の教えは、彼の帰国後、増員された有能にして献身的な宣教師らの布教によって信者の数を増していった。一五七九年ごろには信徒の数は十五万、会堂も二百を数えたという。これらの数字には多少の誇張もあろうけれども、一五八一年にはパリニャーノが日本の布教状況を視察する巡察使という使命を帯びて派遣され、キリシタン大名といわれた大友、有馬、大村の大名たちに諮ってローマ教王のもとに使節を派遣するという大計画を立案し、四人の少年使節派遣という形で一五八二年に実現されたのである。引率者としてゴアまでパリニャーノ。三年二か月を要してローマに入り、法王グレゴリオ十三世に謁して大歓迎をうけ、一五八六年リスボンから再びパリニャーノに送られ一五九〇年長崎に到着した。八年五か月という長い月日が流れていた。

少年使節帰国の三年前、信長のあとをついだ秀吉は九州平定の直後に、突如としてキリシタン禁令を發布し、宣教師の国外追放を命じていた。少年たちの活動の余地は全く残されていなかった。

伝道の意味からは少年使節派遣の成果はあげられなかったが、西欧の文化をわが国に紹介するという点で大きな影響を与えている。

その一つが印刷術の移入である。一行を案内したパリニャーノが、ゴアから活字印刷機、活字、その他の付属品を

積み、これを操作する職人もつれてきたからである。

はじめは加津佐、ついで天草の学校、のちに長崎の教会でこの印刷機を使って宗教関係書、文学書、文法書や辞書など三種のものが出版された。俗にキリシタン版と呼ばれる約三十種である。はじめのうちにはローマ字で、一五九七年以降には日本語のものも出版された。先に述べた

ラ・ポ・日対訳辞典 一五九五年 天草

日・ポ辞書 一六〇三年 長崎

もこのキリシタン版の一種である。

「ラ・ポ・日対訳辞典」のそろばんについて述べた原文は

Abaculus, I, dimin, Idem, Item, Tentos Pera fazer

Conta, Iap. San. Soroban.

Calculus. I, Lus. Seixinho, I, Pedrinha.

Iap. Comacanaru ixi. Item. Peçado enxadrez.

Iap. Xôguino Vma. Item. Pedra doençado.

Iap. Xeqirin. Item. Centos ou tentos de Contar.

Iap. Soroban, Sangui.

要するにアバクルス、カルクラスの二つの見出しのところに「計算に使われる器具、算、そろばん」という意味が

述べられている。

「日・ポ辞書」の方には

Soroban. Taboinha, Com. Contas efadas em arame Por

Onde Contão os China & Japoê.

“珠を針金にさしとおした小さな板で、支那や日本で計算に使う。”

と説明してある。

これより以前にそろばんのことを誌した文献にルイス・フロイスの「日欧文化比較」がある。刊本にはならなかったが一五八五年（天正十三）に加津佐でまとめられた小冊子で、スペインのマドリード市にあるアカデミア・デ・ラ・ヒストリアの書庫に自筆草稿が架蔵されているという。<sup>①</sup>

“われわれの間では計算は鷲ペンまたは数取札 (tenos) でおこなう。日本人はジナ (Jina) を使っておこなう”と説明がある。つぎに述べるように、ジナはそろばんのことである。

「日・ポ辞書」の編集に大きな寄与をなしたジョアン・ロドリゲスは一六〇四年から八年にかけて「日本大文典」三巻を長崎学林から出版した。土井忠生博士はこれを全訳されたのでわれわれもその恩恵に浴することが出来るわけであるが

数名詞について 第一巻

数について 同前

長さの単位 第二巻

数名詞、計算法 第三巻

などの記載はまことに興味深いものがある。

日本の計算法の種類の名、その他計算に使われる名称、日本式の数表について<sup>③</sup>の章でロドリゲスは

日本人の使う計算法の種類は四つの普通のものがある。すなわち

- 1 “置算”<sup>④</sup> (Gisan) または “置く算” (Vocusan) 加算。
  - 2 “引き算” (Fiquizan) または、引きそろばん (figui soroban)
  - 3 “かけ算”<sup>⑤</sup> (Caquezan)
  - 4 “八算” (Fassan) または “わり算” (Varizan) 九までの一つの数によるわり算のなじな (Najina)
  - 5 “見一無頭算”<sup>⑥</sup> (Quenichi nutozan) 大数によるわり算のなじな。中略
- そろばん (Soroban) すなわち Tina (じな) 計算する道具

と述べている。さきに私はこの文献の存在から、従来数学史家あるいは歴史家が、日本のそろばんの発祥を毛利勘兵衛重能の「割算書」刊行以後（一六二二年、元和八）に求めていたことの誤りを訂正させていた<sup>⑦</sup>が、いまでは私の説に同意され、諸書に引用されているので大変喜んでいいる。

このように、「日欧文化比較」をはじめとして「ラ・ポ・日対訳辞典」「日・ポ辞書」「日本大文典」などの存在

は、日本のそろばんの歴史、特に伝来の時期を考える上に貴重な資料となっているのである。

そればかりではない。山口正君は、西村春吉氏蔵になる南蛮屏風の中に、そろばんを弾いている男の絵を発見された<sup>⑧</sup>。

この時期には、「職人尽絵」屏風図の例にみられるように、一つの作品が出来上ると、それと同じような画題の作品が他の絵師の手によって描かれる場合が非常に多い。したがって、各地の美術館を尋ねては南蛮屏風の閲覧を願わずに分探してはいるのだがまだそろばん図は発見できない。大矢真一先生が、秋田の美術館で南蛮屏風の中にそろばんがあると教えられたことがあるといわれたので探して見たのだが、特別展の折に、他から借用したものらしく、同館には収蔵されていなかった。とにかく日本のどこかの美術館の収蔵品のなかにそろばんの描かれている南蛮屏風があることだけは事実である。識者のご教示を得たい。

キリシタン信仰の表章である十字架を、透したり刻したり、あるいは象嵌、肉彫りなどをした十字架ツバをクルス罈というのだそうだが、昭和四十四年四月銀座の松阪屋で開かれた刀剣展覧会にドイツ人ファーレンホルス氏が明治の初期に蒐集したものが日本人の手によって入札購入され即売された。その中にそろばん罈があった。二代目若芝喜左衛門の享保初期（一七一六〜二三年）の作品である。恩師山崎与右衛門博士に連絡して先生が購入されたが、五珠一、一珠五つのそろばんが浮き出ており、右側に十一の金象嵌がある。厚みの部分には二十九人の人物が浮彫りされている。このうち三人はそれぞれ手で目、耳、口をおおっている。「見ざる、聞かざる、言わざる」を表わしているのである。博士は十一の金象嵌と二十六人の人物の存在から、慶長五年（一五九七）二月五日、長崎の西坂で、秀吉

の厳重な禁教令にふれて処刑された殉教者二十六人を表わしたもので十は十字架を表わし、そろばんは商人を象徴するから、苗字帯刀を許された長崎の大商人が若芝に依頼して秘かに作らせたものであらうと推論された。<sup>⑩</sup>

このそろばん鐔は前に記したとおり十八世紀の作品であるから、島原の乱（一六三七）ころまでのものを本物のクルス鐔と呼んでいる範疇には入れ難い。がしかし、島原の乱以後は、武士はおろか町人でも、このようなものを帯用すること、所有することはほとんど不可能だったに違いない。こういう時期であったから、依頼した商人も、作った若芝も、秘密裡に取引したものであらう、隠しクルス鐔と呼ぶ方が正しいのかも知れないが珍らしいものである。

最後にそろばん書について一言しよう。従来の数学史家、歴史家がそろばんの創始者として珠算史のまっ先に紹介していた毛利重能のことについてである。

彼の著になる本で現在われわれが「割算書」と呼んでいる一六二二年（元和八）の刊本がある。刊年を記したものは日本で最古の数学書で、東北大学に三冊（二種）日本大学に一冊を蔵するのみである。日本大学の割算書は筆者が故人の養子さんをお願いして他の数学書とともに一括譲りうけたものである。

この書物には題簽も内題も無い。目録のはじめの部分に割算目録之次第とあり、内容が割算のことを述べているので「割算書」と呼びならされているのであるが、この開巻第一丁に有名なつぎの序文がある。

夫割算と云ハ 寿天屋辺連と云所に智恵万徳を備ハれる名木有 此木に百味之含靈の菓一生 一切人間の初夫婦二人有故是を其時二に割初より此方割算と云事有 八算ハ陰懸算ハ陽争陰陽に洩事あらん哉 大唐にも増減二種算と云事有 況我朝にをいてをや 懸算引算馬と撰出 正実法と号 儒道仏道医道何れも算勘之専也



「旧約聖書」創世記「天地創造、エデンの園」の章を知っていた毛利重能が、アダムとイヴがリンゴを二つに割って食べたことをもって割算の起源だと述べているのである。

割算書の刊行は元和八年である。教会史上著名な長崎の大殉教が行なわれたその年に、旧約聖書を持ち出して公刊したということとはまことにもって大胆きわまることであり、四冊の現存本の中に三種の版木が使われているほどの売れ行きを示した本としてはその伝存が極端に少ないのも、序文の関係から所有者が後難を恐れて始末してしまったところに原因があるのではなからうか。

重能が宗門と何らかの関係を持っていたのではなからうかという疑問もでてくるが、彼が信者であったという記録はいままでのところ見出されない。

さらに、初期の数学者として百川治兵衛の名も忘れることのできない存在である。毛利重能が割算書を公刊したその同じ年の元和八年に自筆の稿本「諸勘分物」を著わし、その第二巻が現存しているからである。著者の百川治兵衛が一六四五年または一六五五年に刊行した「新編諸算記」の著者の百川忠兵衛と同一人物であるか、異人であるかは未だに諸説入り乱れていて確かではないが、百川治兵衛の名のあるものに

諸勘分物 第二巻 元和八年（一六二二）

弟子に与えた書状 寛永六年（一六二九）

が現存し、寛永十年、十二年にも弟子に書状を与えたことが文献によって知れるのである。<sup>⑫</sup>彼の経歴も詳らかではないが、慶長六年から天保九年までの佐渡の奉行所の記録を集めた「佐渡年代記」巻二によると、

寛永七年のところに

越中の国より、百川治兵衛といふ算術者来りて、柴町泉屋多兵と云ふ者が家に寄宿し、算学を弘むとあり、寛永十五年のところには

算術者 百川治兵衛 切支丹の類族の聞えありて牢舎せしむる処、弟子証人に立って依て免す

とある。さらに「佐渡風土記」には、同じく寛永十五年戊寅年に

寅九月百川忠兵衛越後於新潟ニ死 忌日廿四日又ハ廿七日也云 改名百川九也

此者当国にて切支丹の儀に付牢舎被仰付 弟子共訴訟ニ付出牢 十路盤治兵衛也云

とある。年代記の治兵衛が、風土記では忠兵衛、九也、そろばん治兵衛と呼ばれる人物になっていて、同一人物と見ているわけであるが、それはさて置き、百川治兵衛（諸勘分物の著者）がキリシタンの信者か類族かと疑われて調べをうけ、弟子どもが証人にたつて許されたところを見ると、軽い嫌疑であったのだろう。何か疑われても仕方のないようなものを持っていたことも考えられるわけである。

もう一つの文献を加えてこの章を終ることにしよう。キリシタン文化という観点からは適当な史料では無いが、フランソア・カロン（八代目のオランダ商館長）の「日本大王国志」一六四五年につきの記載がある。<sup>⑬</sup>

（彼らは、日本人は）

伊太利流の簿記法を知らないが、勘定は正確で、売買を記帳し、一切が整然として明白である。彼らの計算は細い棒の上に円い小玉を刺した板の上で行なわれる（支那人の使用するものと同様であるが、それより大きい）加減乗除

比例まで整数分数とも出来、そうして和蘭オランダにおけるよりも、また速算家でない尋常の和蘭人が計算するよりも、一層迅速正確である”

と述べている。無論そろばんのことを云っているのである。

前にも一言したように、そろばんの歴史を考える上には、キリシタン文化を無視し得ないのである。筆者の努力如何に関らず、初期の日本の文献の中に極端にそろばんの記載の少ない現状を見るにつけ、外国人、特に宣教師の書いたものの中にそろばんの記載のあることは大きな意味を持っている。今後ともこれが発掘に力を注ぎたいと思う。

## 注

- ① 大航海時代叢書VI 岩波書店、一九六五年 同書には日本王国記と日欧文化比較が収められており、497頁以下の日欧文化比較の解題による。
- ② ロドリゲス 日本大文典 三省堂 一九五五年
- ③ 前掲書 770頁以下
- ④ 土井忠生博士は *Chisun* を置算と訳しておられるが、私は“地算”であると思う。西鶴にこの用語が使われている。
- ⑤ 八算というのは一桁のわり算のことで、一桁のわり算には一から九まででわかることの九とおりがあから、中国では九婦と呼んだ。日本では一でわるわり算は必要ないということと二から九までの八とおりの計算法という意味で八算と呼んだ。二二天作の五とか三三六十二とかわり声を用いて行なうわり算のことである。
- ⑥ 見一無頭算というのは二桁以上のわり算のことで、見一無頭作九一とか帰一倍一などのわり声を使うことから、見一無頭算とか、さらに略して見一とかと呼んでいた。
- ⑦ 日本珠算79号、昭和35年7月号「そろばんの伝来についての一考察」。同論文は山崎博士との共著で、「東西算盤文献集」第二輯、森北出版KK 一九六二年にも収録されている。

- ⑧ 全珠連会報 55号
- ⑨ 拙著「珠算の歴史」富士短大出版部 一九六四年98頁以下
- ⑩ 日本二十六聖人保存会では、昭和37年6月10日、記念碑を西坂の丘に建立している。
- ⑪ そろばん鐺 山崎与右衛門 日本珠算 190号 一九六九年
- ⑫ 拙稿 百川治兵衛と百川忠兵衛 数学史研究 43号 一九六九年10月12月参照
- ⑬ 日本大王国志 カロン原著 幸田成友訳 平凡社東洋文庫90 一九六七年 188頁

### 三 元禄文化とそろばん

徳川家康が征夷大將軍に任ぜられた一六〇三年（慶長八）から、慶喜が政權を朝廷に返した一八六七年（慶長三）までの二六五年間を江戸時代と普通に呼んでいる。人によっては一六〇〇年（慶長五）の関原の戦を始めとしたり、秀吉が死んだ一五九八年（慶長三）から数える場合もある。

江戸時代に、安土桃山時代の約四十年を加えた約三百年が近世と呼ばれる時期である。<sup>①</sup>江戸文学史を高野辰之博士によって区分すると、

寛永期、元禄期、享保・宝暦期、明和・寛政期、文政天保以降の五期となり、小高敏郎は近世初期を寛永期、寛文期、元禄期の三つに分けている。<sup>②</sup>吉田精一博士は近世文学を前期（一五七三～一七五〇）後期（一七五一～一八六八）の二期に分けている。<sup>③</sup>

元禄という年号の時代は一六八八年（元年）から一七〇二年（十六年）までのたった十六年間であるが、元禄文化というときには、延宝、天和、貞享、元禄、宝永、正徳の四十数年を加えるのが普通である。でない、大石慎三郎がいうように<sup>④</sup>、元禄時代を代表するものとされる西鶴（元禄六年に死亡）、芭蕉（同七年に死亡）近松（正徳、享保時代の作家）、師宣（元禄七年死亡）、光琳（宝永以後）らはみな元禄からはずれてしまふからである。

この章では、上は延宝から下に享保を加えた約六十年間の文化を元禄文化と呼ぶことにする。

刊記のある現存最古の算術書は、前に述べたように毛利重能の「割算書」一六二二年（元和八）であるが、それ以前にも算書は刊行されている。重能のこの本の跋文にも

「右はんきにおこし世間に在之と云共割の次第廻遠にしてわけ難聞に付拙子知音富小路通讀州寺町に市兵衛尉と申候仁所望被申候間悉改作直右はんきの分大形書付畢 中略

右作直悉改事は撰津国武庫郡瓦林之住人今京都に住割算之天下一と号者也

元和八年初春 重能 ㊦ ㊧

とある。重能自身の元和八年以前の著書があつて改め作り直したのか、重能以外の著者の算術書があるが迂遠でわかりにくいので重能が改め作り直したのかわからないが、最近の研究によると<sup>⑤</sup>、龍谷大学蔵の刊本「算用記」と下平和夫蔵の写本「算用記」寛永元年はほとんど同一であり、かつ「割算書」の種本となつたものであるという。元和、慶長ごろには算術書も出版されていたものごとくである。

「割算書」の刊行された前後の文学作品の中にそろばんが登場するのはまことに数少ないが、つぎの二つを紹介しよ

う。

(1) 鷹筑波 寛永十五年（一六三八）跋

山本西武にしなげが本名であるが、西武を西武さいむとよんで俳号に用いた。貞門俳諧の大御所松永貞徳に幼時から師事した。貞徳は批点を施した中から秀逸を抄記しておき、老年に及んで西武に命じて清書刊行させたのがこの「鷹筑波」である。刊行は寛永十九年、た・か・つ・く・はの五巻から成る。跋文にその間の事情が詳しい。<sup>⑥</sup>

卷第三の河瀬弥兵衛良継のところに

あき人はあらずやうかましこくそかひ

かた地にぬりてをけるそろばん

がある。この書には三十年間に及ぶ作品を集めており、秀吉の発句なども入っているから右の句も相当古いものであろう。

(2) 毛吹章 寛永十五年序

貞徳に学んだ松江重頼の編集した貞門俳諧の方式の書である。古来の連歌師や、近世の俳諧者と同じように四方に行脚して諸国の名物なども見聞し、庭訓往来に述べられている分を除いて巻四に五畿七道の国別に排列し、松前や琉球や高麗などの異域の産物も付け加えている。

従<sup>ニ</sup>諸国<sup>一</sup>出<sup>ル</sup>古今<sup>ノ</sup>名物聞触見及類載<sup>レ</sup>之。但<sup>シ</sup>庭訓<sup>ニ</sup>用分<sup>ハ</sup>除<sup>ク</sup>之。

とあって、

肥前の項に

…長崎木綿 畝指踏皮<sup>ウネザシノタビ</sup> 鬚紙<sup>モトヒ</sup> 紙帳 紙被<sup>フスマ</sup> 唐蒔絵 土圭細工<sup>トケイ</sup> 絵莚<sup>ムシロ</sup> 絵簾<sup>スダレ</sup> 竹曲籜<sup>タケヤヨクノケ</sup> 十露盤…

摂津の項に

天満宮前大根…川崎嶋木綿 フケ嶋福島細木綿 野里川嶋村蟹 京橋網嶋網 今橋戸障子 高麗橋団子古手道  
修谷延命散 平野町傘 後町摺碁石 安土町厨子 唐物町切革細工 久宝寺紙子 横堀川引板 阿波堀川石灰 安  
堂寺髪モジ 津村木綿織帯 難波橋筋文台 阿波座指物 大溝筋木綿組緒 大坂高津瓦 生玉澀土<sup>ノサビツチ</sup> 玉作疊針 天王寺  
鋸 住吉御稜団子 難波干瓢 今宮千生瓢箪 遠里小野油 築嶋櫛 堺北庄大道筋朱座 柳町針口 桜町鉄炮 小桜  
町多葉古包丁 土井原鋸 中浜懸硯 机 十露盤 天秤 旦過小路<sup>タシブノ</sup> 田爐裏<sup>イロリ</sup> 山口筋大工墨斗糸<sup>ツボイト</sup> 川口蜆 尼崎餅 貝  
爪白蟹 西宮水饅<sup>ミヅマ</sup>…<sup>⑦</sup>

がある。肥前の長崎、摂津の中浜（大阪市城東区）がそろばんの名産地であったというのである。

現存するもので刊記のある二番目の日本の数学書（和算書と呼ばれている）は吉田光由の「塵劫記」寛永四年である。著者の光由は角倉の一族で、初刊本は素庵の版行した嵯峨本の一つである。寛永文化とそろばんと題して別章に述べたほうがよかったかも知れないが、本章のはじめに述べておく。

主題に移ろう。

## 1 狂歌

この期を代表する狂歌集に

江戸文学と珠算

古今夷曲集(ひなぶり)(行風) 後撰夷曲集(行風) 吾吟我集(わが)(未得) ト養狂歌集(ト養) 鳩杖集(信海) がある。行風(生白堂)と信海(宝蔵坊)は僧、未得は貞徳門下の俳人、ト養は幕府の医者で法眼に叙せられている。それぞれ本業はあったのだが狂歌の方が有名である。

元和、寛永からこの期までの間に和算は高度の発展を遂げている。世界的な数学者関孝和(?-1708)を輩出したのもこの時期であった。和算の根底をなしていたのはそろばんであり、勃興した町人の台所を賄ったのもそろばんであった。狂歌の中にも庶民が抬頭する。

古今夷曲集 重頼門下の俳人 生白堂行風編 寛文六年(一六六六)刊にはそろばんの狂歌はないが、九九をもじったものが多い。

後撰夷曲集 生白堂行風編 寛文十二年刊に 残暑 勝方

見一の 声もそのころ 暑さには をくにをかれず 扇ひらひら(巻第三)

たれとしらぬ人と道つれせしに算用の事とかたられけるいとよしありければよみてつかはしける 知度

算用も よきかんはらの人ならば そろそろはんに かたりあふへき(巻第六)

寄十露盤恋 瑞生

いくたひも あはて待そろはんことに いつはりにくの十八の君

そろはんの つ正定ふ貞富सान文を送れとも 引にひかれぬ 君はさんさん

つもる事 そろそろはんにかたろやれ あふた時には心をかすと(巻第七)



などのそろばん句が登場する。刊年こそ文化六年（一八〇九）になってしまったが、永田貞柳（信海に師事、紀海音の兄、享保十九年歿）の著書の中に見える狂歌を「貞柳翁狂歌全集類題」と題して刊行したが、その中にも大黒の十露盤をおくのを見て

そろはんを 置いてにににと笑ひぬる 大黒殿は かねやのひけん  
商

十露盤を 枕の夢のさめよかし 持ても死なぬ 暁のかね  
がある。

## 2 俳諧

元和、寛永のころから勃興した貞門の俳諧は、俳諧をして連歌から独立せしめ天下を風靡する勢であったが、言語上の遊戯をもっぱらとし、そのおかしみも重苦しいと感ぜられて、貞門創始のころから五十年を経て寛文の末に、自由、滑稽、清新、潑刺な風潮を持つ西山宗因一派の談林風俳諧にその主導権を奪われたのであった。以下「談林俳諧集」上下から<sup>⑧</sup>そろばん句を拾ってみよう。

大坂独吟集 西山宗因点取、延宝三年（一六七五）刊

意楽

十といひて四つの時めく年始哉

発句よりは若老うら山しく候

春日かゞやく算盤の上

積り高何程ととふ雪消て

重安

分散衣類売しあだし野

十露盤の露塵埃拂捨

談林十百韵 上・下 松意 延宝三年刊

今そ引宮木にみねの松丸太 一鉄

称宜も算盤 三一六二ノ 志斗(三二六十二の誤)

穀物の相場さためぬ露時雨 松白

先算盤に虫のかけ声 一鉄

誹諧当世男 蝶々子 延宝四年刊

冬部 歳暮

そろばんのほこりや払ふ大晦日 柴女

俳諧雑巾 常矩 延宝九年刊

塵劫記いや花にあり男女の数 焉求

飛雁の日本の男女数見ゆる 常矩

俳諧当流籠技 宗旦 延宝六年刊

鈴虫松むし見一の声 百丸

俳諧江戸蛇之鮓 言水撰 延宝七年刊

曾呂盤に法のともし火 影暮て 言水

江戸八百韻 幽山 延宝六年刊

評判の日記十露盤の露 来雪

庵桜<sup>ゑん</sup> 西吟 貞享三年刊

秋の暮 十露盤の粒いざいさせり 鉄卵

大矢数 西鶴 延宝九年刊

十露盤に泪の玉が置れうか

無念や恋はうせ物にたつ

内証の苦は色かゆる目安書

十露盤上手といはれし我も

算用語十露盤枕ねる計<sup>ばみり</sup>

雨にあらしに舟間也けり

塵劫記もとは一つの月の影

江戸文学と珠算

卷一

卷二

秋の色とて表紙が懸る

算用や世界のこらず砂の数

卷三

土圭仕懸でめぐる月景

元来は埒つもつて塵劫記 勝時

卷五

談林派の発句はことさらに破格の調子を用い固定した型を破ろうとするものであった。卑俗なものに転向する手法も好んで用いられ生活がにじみ出ている。しかしその末流ともなるといたずらに新奇を求めるものとなり墮落して行った。やがて貞門や談林の俳人の中から、俳諧をまじめな文学に引き上げようとする機運が起る。

松尾芭蕉もその一人であった。

芭蕉の一代における俳諧の代表的な集に「俳諧七部集」がある。冬の日、春の日、曠野、ひさご、猿蓑、炭俵、続猿蓑の七部であるが、

ひさご 元禄三年（一六九〇）刊に

そろばんをけば物識りといふ

がある。この集は芭蕉が奥羽行脚の後に成ったものであるだけに蕉風円熟の境に進む風潮を示しているという。<sup>①</sup>わびとかさびとかが蕉門俳諧の特色をなしているのだが、なおかつ右のような句も見出すことができるのである。

### 3 歌謡

三味線の歌、箏の歌もこの時代に完成し、長歌、端歌が作り出され、流行歌は続出した、屋外踊歌は諸国の盆踊歌

を、屋内踊歌は劇場およびそれ以外のいわゆる座敷踊が主で盛に行なわれた。「淋敷座之慰」延宝四年、「松の葉」元禄十六年、「絵入増補松の落葉」(宝永元年刊落葉集の改修本)宝永七年などは、当時相續いて出版された歌謡集の代表的なものである。

「松の落葉」には、

大津をひわけ之踊に

“…かけ針くけ針たたみ針…菅笠よりぼに算盤玉、関の清水はうき名所…”

とある。江戸時代から明治時代にかけてのそろばんの産地として著名であった大津の文献として、黒川道祐の「雍州府志」貞享元年(一六八四)につぐ重要な史料である。<sup>⑩</sup>

#### 4 小説

##### 1 教訓小説

山岡元隣<sup>⑪</sup>を俳諧師とみるよりも、教訓小説家と見た方が適當であろう。「他我身の上」「小盃」などは随筆とも教訓小話集とも見られるからである。寛文十一年(一六七二)の作に俳文集「宝蔵」がある。第三巻に「十露盤」と題するものがある。

##### 十露盤

算用は六芸のひとつに出て、乗除商実法の法有て、遠くは天地の運行、日月の盈虚、山をこぼち、江をうづめ、近くは田島の広狭、金銀米穀の員数、ひとつとしてのせずといふ事なし。いはんや往を聞て来れるをしるも、皆数の理

にもるといふことなきをや。われ心見にこれをいはん。世に算をしらざる人もなく、またしりたる人もまれなり。何をか算しらざる人もなきといふ。愚かなる人も、二九の十八、三九廿七をよびて、金を以って銭をかい、銭をあつめて金となせり。何をかしりたる人もなきといふ。もとより人の命に価なし。若人きたりて万貫目の銀をつみて命を買んといふに、たれか売人の有りぬべき。しからば人生七十古来稀なる命、一日のほどいかほどの価にあたれる。わづかの利欲をむさぼらん為に、形をいたため心を苦しめ、老の来るをもしらず、命のちぢまるをもしらず、えたりとおもふは、小につきて大をわするるなり。これを算用をしりたりとやいはん。しらざるとやいはん。月をもめでじ、これぞ此、つもれば人の老となるものとだによみしもあるを。

算用は しらぬが花ぞ 老の数

ソロバンノクイジンケンコン  
算盤極意尽乾坤 (算盤の極意、尽乾坤)

セイシンギヤウドウソンス  
日月星辰行道存 (日月星辰、行道存す)

六々元来三十六 (六六元来三十六)

イッルニナクアイルニナシ  
出無穴レ 矣入無レ 門 (出づるに穴なく、入るに門なし) ⑫

浅井了意の「浮世物語」(寛文初年、十年に再刊)⑬を教訓小説と呼ぶのも適當でないかも知れない。が、主人公瓢太郎が親ゆずりの財産をわがままに使い果し、名を兵太郎と改めて大名奉公を思い立つ。親の知行の感状を出したところ

「いや 今の世は武勇も首勘定も氏も系図も要らず、三羅盤を得たるか、田畠の積を知りたるか、米の売様、金銀

の回しをだに心得たらば、召抱へられん」と仰せらるる所により、親心得て「随分の憶病者にて侍べれども、算用方はよく致す」と申しされしかば、「それこそ何より重宝なれ、急ぎ召し抱へよ」とて、やがて先づ若党になりて出たりけり。……<sup>⑭</sup>と続けて訓戒、例話を配列して随筆兼訓話集となっている。つぎに述べる西鶴の浮世草子の出る前に、現世を時には無責任とも受取れる態度でその処生法を説いたのであった。武断政治から文治政治への変換、金の力が人間の生活の上に大きな働きをし、人心が金の損得に動かされるようになり、一般に合理的、現実的になったといった風潮をそこに見出すことができるのである。

## 2 西鶴

天和二年（一六八二）の「好色一代男」は井原西鶴の浮世草子の第一作であった。三十六才のとき大坂生玉の本覚寺で一日一夜に千六百句の独吟を興行した彼は、三十九のとき生玉社別当南坊において聴衆数千人を前にして四千句独吟に成功、さらに四十三才のとき摂津住吉の神前で一日一夜に二万三千五百句独吟という超人的な記録を樹立し、俳壇に、不朽の名をなしたのであったが、一代男の述作はその二年前四十一才のときのことであった。初めから作家として世に立とうという気持で著作したものでは無かったのだが、結果的には予想以上の好評を得たので二年後「諸艶<sup>しよえん</sup>大鑑<sup>おおかがり</sup>」（好色二代男）を発表、つづいて「好色五人女」「好色一代女」「男色大鑑」などの好色物と呼ばれる作品を著作して行った。歿後の刊行に「西鶴置土産」がある。男色大鑑で武士の生活の一面にふれた西鶴は、さらに武士氣質そのものを題材にして武家物と呼ばれる作品を書いた。「武道伝来記」「武家義理物語」がこれらである。しかし町人出の彼にとっては得意という分野では無かった。そこで武家物から転じて、町人生活を描写の対象にした。町人

の成功致富と失敗没落の両面を説いて喜劇悲劇を筆にしたのである。「日本永代蔵」「世間胸算用」「西鶴織留」はその代表作で俗に町人物と呼ばれている。好色物・武家物・町人物の範疇に入れ難い作品に「西鶴諸国はなし」「本朝桜陰比事」「西鶴俗つれぐ」「懐硯」「新可笑記」「万の文反古」などがある。雑話物とでもいうべき作品である。以下西鶴の全作品の中から、そのそろばん観を抜出してみることにしよう。

俳諧

○生玉万句 寛文十三年 西鶴自撰

十露盤も更行鐘の音添て 似扇

雨に花ちるかやはらりさん候<sup>⑮</sup> 在宣

○独吟一日千句 延宝三年序

十露盤にをく露のしら玉

○俳諧大句数 千六百独吟俳諧を上梓したもの。延宝七年

行水<sup>⑯</sup> ⑮ はや算用や置ぬらん

揚銭を<sup>⑰</sup> ⑯ 中てはならぬ算用詰

加賀殿の御下の露ははらりさん

○物種集 延宝六年

ふり積る算用もせず松の雪 伊丹 一友



○胴骨 延宝六年

はちくくとひけやてんに亀井算<sup>⑱</sup> 由平

○大坂檀林桜千句 延宝六年 青木友雪撰

みかゝはひかれそろはんの玉 由平

つもりてはちく滝の白玉 由平

○太郎五百韻 延宝六年

つもるおもひは二三百両 梅翁

袖にうくなみたの玉やはちくらん 由平

最一さんかけはしこゆる水寒て 西鶴

雑話物

○本朝桜陰比事 元禄二年 卷ノ五

“小指は高くよりの覺”につぎの話がある。現代文に直してみよう。

昔、都の両替屋に金拾両を借りに来た若い手代があった。当座貸とて覚帳に記しただけで四五日を経過した。貸手の若者はやがて覚帳に入金の記録のないのに気づき取立に行つたところ、借り手の手代はその翌日返した筈だという。貸した日以後の出入を吟味したが確に十両不足。双方の親方は書付けを持って訴え出たところ両方の言分を聞いた奉行は

借手に対し「物覚え悪い若者よ、忘れたことを思い出せ」といって左右の手の小指をこよりでくくり、これに封印して帰させ、貸し手の手代に対し「油断するからこんな始末になる。このことの済むまで片手に二十五桁のそろばんを離すべからず」と過怠を仰せつけ宿に返したという。借手の手代は、はじめから悪心あつての上でなく、まして他人にも迷惑のかかること「不念にて拾両の金子を帰さぬことを今思い出しました」と申し出た。奉行も、「合点ゆきて金子戻す上は子細なし」とてお許しになったという。

まさにそろばんを題材にした小話とでもいうべきものであろう。

以下続稿

## 注

- ① 江戸文学史 上、中、下 東京堂 昭和27再刊
- ② 近世初期文壇の研究 明治書院 昭和39
- ③ 初歩日本文学史 光文社 昭和35
- ④ 岩波新書 元禄時代 昭和45
- ⑤ 下平和夫 和算の歴史(下)富士短大出版部 昭和45年
- ⑥ みそとせあまたより丸に見せ合られしはいかい共をとりあつめみれば、今の人のくちにある作に似たるもあれど、かへりてこれが先なれば、等類として捨がたし、部立ぶたてをわかたば又年月を送らんと、闇取くらみに次第をさだむ。もとみし句どものみえぬもあれど、国ところをしらねばせんかたなし、身つかれ心ほれぬれば手づからもえよらまず、西武書生せいぶしやうせいにあつらへつ、他門の人の為ならねば、まり有ともなじり給事なかれ。

寛永十五年五月廿五日 長頭丸

俳書大系

貞門俳諧集 上巻 p. 274 昭和四年による。長頭丸は貞徳の号。

- ⑦ 岩波文庫 毛吹草 p.164 p.185
- ⑧ 俳書大系 談林俳諧集 上巻、下巻 昭和四年
- ⑨ 高野辰之 江戸文学史 上巻 p.202
- ⑩ 拙稿「古そろばんの産地別比較」昭和四十六年度個別研究論文 東京都私立各種学校協会「研究紀要」 p.31～p.41 昭和四十七年
- ⑪ 貞徳門下北村季吟の門人
- ⑫ 「宝蔵」の中のそろばん O・H 月刊珠算界一二〇号 一九六二年五月にも紹介がある。
- ⑬ 寛文十年の再刊本は「絵入浮世ばなし」天文二年に「続可笑記」と題して刊行
- ⑭ 仮名草子集 日本古典文学大系 岩波書店 p.257
- ⑮ そろばんの破算にはらりさんをかけている。
- ⑯ 行水コウスイの早さ一昼夜七十五里リという
- ⑰ 中ナカではとは暗算チユウではの意
- ⑱ かけ算の九九を使って行なう割算セキサンの算法で、帰除法キョトウに対して商除法ショウトウと呼ばれる。

